

図書室月報

2023年(令和5年)11月5日

第726号

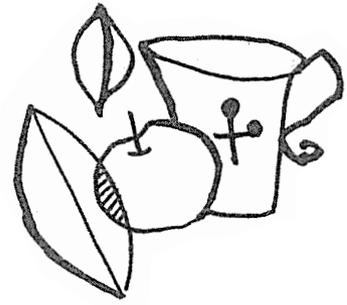
〈図書室のつどい 参加者の感想〉

すが
管啓次郎さんのお話

「旅と本と詩と」をお聞きして

(2023年8月6日開催)

佐藤 雄一



つい先日、娘が生まれた。お祝いムードと新しい日課が一気に押し寄せ、慣れない日常にクラクラしかけたころ、管啓次郎さんの講演会の開催を知った。翻訳家であり詩人、そして旅人でもある管さんは、異質なものと出会いをいつも楽しんでるようにみえる。管さんのようにこの日常を捉えられたら、そんな思いで久しぶりの外出をした。

講演会のテーマは「旅と本と詩と」。最近刊行された、書評や読書論を収めた『本と貝殻』、詩集『一週間、その他の小さな旅』を中心にお話しされる会だ。対談相手として国立市の出版社・書肆梓代表の小山伸二さんおやまも登壇する。管さんと小山さんは詩を書く仲間でもあり、友人でもあるという。

小山さんから紹介があったのち、管さんのお話が始まった。10代で詩に目覚め、それからずいぶん経って50歳から書き始めた。権威の場を気にせず、詩の発表を続けているとのこと。

それでは管さんにとって詩とはどんなものだろう。直近のエッセイから、一歩ずつ踏みしめるようにゆっくりと朗読してくださった。

「詩は書くものではなく見つかるといっからか思うようになった。海辺を歩けばきれいな貝殻や小石が見つかると、森を歩けば落ち葉や蟬の抜け殻に出会う」

詩は「見つかるといっからか」という。見つけるものではない。そして同様に、本を読めば言葉は「現れる」という。

「不思議な紋様のある岩とか、ページをめくると潜んでいるみたくもない昆虫のように、言葉はさまざまな姿で突然現れては読む者を驚かせてくれる」

る」

管さんが話してくださったのは書き方や読み方ではなく、あり方だった。この「見つかるといっからか」「現れる」といった自分を世界に開いていくようなあり方は、旅を楽しむ心持ちと共通する。だから詩と本と旅は似ているのだ。しかし忙まじしい日常にまけてそうしたあり方を忘れていないだろうか。結局のところ、偶然性を受け入れる準備がなければ地図アプリで示された最短距離の移動を繰り返すような時間ばかりが流れていってしまう。疲労は溜まるが刺激は少ない。そういえば最近、毎週木曜に週刊誌を買うようになった。新生児が部屋にいるのになんでゴシップ記事なんて読んでいるのだろう。知らない誰かのことを責めたいわけではないはずなのにイライラすることが多すぎる。私にも旅が必要なのだと思う。むしろ旅するように日常を過ごせたら。

会の終了後、数日前に決めた娘の名前を書いてもらおうと思いつき、新著にサインを求めた。娘がページをめくってくれるようになるまでずっと本棚に置いておくつもりだ。もしページをめくるときが訪れなくても、管さんは「本は読めないものだから心配するな」といつてくれるだろう。きっと本は本の外にもある。それが詩でもあり、旅でもあるのだと思う。半世紀以上続く「図書室のつどい」も同様に。そんなことを思い、軽やかな気持ちで会場をあとにした。

管啓次郎著『本と貝殻』一週間、その他の小さな旅』2冊とも(コトニ社)、『エレメンタル―批評文集』(左右社)ほか多数

ブッククラブから

川越宗一著 『熱源』 を読んで

北川みどり

小説を読む機会がやつとでき、くにたちブッククラブを知り、自分では手に取ることがあまり無い本が読めること、そして同じ本を読んだ方々の感想を聞きたくてブッククラブに参加しました。

文学賞には興味がなく、川越宗一は全く知らない作家でした。

『熱源』を手にしてずいぶん厚い本だ最後まで読めるかなというのが最初の印象です。馴染みのない名前「ヤヨマネクフ」「シシラトカ」「キサラスイ」などに戸惑いながらも読み進めるうちに作品に徐々に引き込まれました。物語の展開が気になって睡眠時間を削ることになり、これはいかんと読むペースを落としたほです。

これを史実フィクションとも言うのか……。場所は樺太、北海道、サハリン、ロシア、ポーランド、東京、南樺太など広範囲に広がり、時代や社会情勢もどんどん変化します。和人による先住の人達への差別や侵略や感染症の蔓延など残酷な事が次々とおこります。侵略は現実の世界中で続いている深い問題で辛くなります。

そんな中でも人としてのお互いの交流や共感も生ま

れています。過酷な中で唯一の希望でありホッとする部分です。実際にもあつたのではないか、ぜひそうであつて欲しいと願いました。

最後まで一気に読みましたが少し残念に思つたことが2点あります。

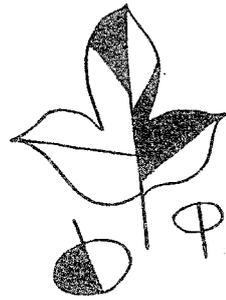
内容があまりにも盛りだくさんで読み手の関心が散漫になつてしまうこと、女性の描き方が少ないことでした。ブッククラブの参加者にも同意見の方がいらつた。女性についての歴史資料が少ないからこそ想像で作者に書いて欲しかった。作品の中では大変な状況の中で自分の意志決定をした強い女性が出てきます。そうではなかった女性についてももう少し具体的に書かれていたらもっと良かったのではないかと感じました。

講師の内藤千珠子先生には『アイヌ』をめぐる物語の暴力―川越宗一『熱源』とレイシズムの現在』をテーマにタイムリーな解説をしていただきました。小説によつて「人種差別をめぐる現代からの読解をしよう」と試みている先生のような文学小説の研究者がいることを知りました。面白い面白いと読んでいてすっかり忘れていた小説の読み方の観点です。うすう

すは感じていた点を社会的に広げて考える事ができました。差別や学問の暴力に気付きにくくなつていいる現代には重要なことと思ひます。また、『熱源』はそうした社会問題にも目を開かせる小説であると再確認しました。

作者の調査力、想像力、創造力に圧倒されました。作者の次の著書『パシオン』もぜひ、今度はゆっくりと読んでみようと思つています。

(文春文庫)



くにたちブッククラブ

―記憶の欠片をひろい集めて―

今村夏子

『むらさきのスカート』

(朝日文庫)

講師 佐藤 泉

(青山学院大学・日本近代文学)

とき 11月9日(木)
夜7時半～9時半

ところ 公民館 地下ホール
申込先 公民館 ☎(572)5141

*次回は12月14日(木)
安部公房『箱男』
(新潮文庫)です。



新着図書から

〈総記〉

明治大正昭和化け込み婦人記者奮闘記

平山亜佐子(左右社)

070

〈哲学〉

客観性の落とし穴

村上靖彦(筑摩書房)

116

〈歴史〉

関東大震災朝鮮人虐殺の記録

西崎雅夫(現代書館)

210

沈黙の勇者たち

岡典子(新潮社)

234

〈社会科学〉

渡辺治著作集 第11巻

渡辺治(旬報社)

308

デンマークにみる普段着のデモクラシー

小島ブロンゴード孝子(かもがわ出版)

311

キーワードで理解する外国人の日本生活ハンドブック

佐藤正巳(とりい書房)

329

出入国管理の社会史

李英美(明石書店)

329

「AKK女性シエルト」から「DV防止法」制定へ

波田あい子(かもがわ出版)

367

おしえてジェンダー! 「女の子だから」のない世界へ

ブラン・インターナショナル・ジャパン編(合同出版)

367

性暴力を受けたわたしは、今日もその後を生きています。

池田鮎美(梨の木舎)

368

災害の日本近代史

土田宏成(中央公論新社)

369

障害と人権の総合辞典 日本障害者協議会(やどかり出版)

よるべない100人のそばに居る。

御代田太一(河出書房新社)

369

ムラブリ

伊藤雄馬(集英社インターナショナル)

382

スカートと女性の歴史

キンバリー・クリスマンIIキャンベル(原書房)

383

〈自然科学〉

宇宙・0・無限大

谷口義明(光文社)

440

進化が同性愛を用意した

坂口菊恵(創元社)

467

言葉はいのちを救えるか?

岩永直子(晶文社)

498

〈産業〉

関東大震災と鉄道

内田宗治(筑摩書房)

686

〈芸術〉

私の自由な東ドイツの少女時代

クラウディア・ルツシュ(彩流社)

726

ぼくはあと何回、満月を見るだろう

坂本龍一(新潮社)

767

〈文学〉

ジェンダー×小説ガイドブック

飯田祐子(ひつじ書房)

910

「東京文学散歩」を歩く

藤井淑禎(筑摩書房)

910

文学する中央線沿線

矢野勝巳(ぶんしん出版)

KS 910

関東大震災百年―文豪たちの「九月一日」

石井正己(清水書院)

911

夜果つるところ

恩田陸(集英社)

911

この夏の星を見る

辻村深月(角川書店)

911

日本語人生百景

中村明(青土社)

911

図書館のお夜食

原田ひ香(ポプラ社)

911

いまだ人生を語らず

四方田犬彦(白水社)

911

〈アンケートのおねがい〉
今年印象に残った本は何ですか?



図書室月報では、毎年1月号で「今年印象に残った本」の特集をしています。ぜひご協力をおねがいます。しめきりは、12月6日(水)です。くわしくは、図書カウンターまでどうぞ。

〈一節〉

北沢彰利 著

森の赤鬼

—C・W・ニコルの軌跡—



植物と動物にとってすみ心地のよい森をつくるには、「何を残すか。何を植えるか」その都度の判断が必要となる。下草刈り一つとっても、ただ刈り取るわけにはいかない。残す幼木を傷つけないように、注意深く進めるので時間もかかる。

ニコルと松木は、森と対話するように、二人三脚での整備作業を進めていった。そう言っても、最初から息が合っていたわけではない。

「まあ、こつちも仕事があつて忙しいつうに。ニツク(ニコルの愛称)はそんなことは知らねえから、俺が行かねえと、一人で木を切り倒しちゃう」

當時を回想する松木は、苦笑して続ける。

「ニツクは、何使つて切つたと思う? 斧だよ。ど太い木も、斧で倒すんだぜ。それも、倒した木は、てんでバラバラあつちこつち向いてるんだ」

長く林業の仕事をしてきた松木にとって、倒す木を同じ方向に寝かせるのは、常識だった。そうでなければ、運び出すのに厄介でかなわな

い。チェーンソーを使わず、力任せに斧を打ちつけるのにもあきれた。しかし、これにはニコルなりの流儀があつた。(信濃毎日新聞社)

図書室のついで

へくにたち人権月間 2023

ファッションを彩る革製品の「裏側」 「革への」の仕事と「ファッション倫理」の変容

講師 西村 祐子 (駒澤大学)

流行の最先端をゆく高級バッグから一点モノの財布まで、革製品はファッションを彩る必需品です。他方、皮をなめす作業はケガレと見なされ、一般市民から忌避されてきた歴史もあり、皮革という素材は高級さと宗教的なタブー、忌避感などが同居しています。

今回は講師の西村さんのお話から、最先端のファッションや私たちの消費文化を通じて、皮革文化に関わる差別の歴史や自然破壊、動物愛護、大量廃棄といった倫理的な問題について考えたいと思います。

〈西村さんの本〉『皮革とブランド―変化するファッション倫理―』(岩波新書)、『革をつくる人びと―被差別部落、客家、ムスリム、ユダヤ人たちと「革の道」』(解放出版社) など

とき 11月29日(水)夜7時〜9時

ところ 公民館 3階講座室

定員 会場受講30名・オンライン受講30名

(いずれも申込先着順)

申込先 11月7日(火)朝9時〜26日(日)

タ5時までの間に電話が下記のQRコードより

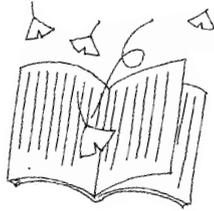
お申し込みください。

公民館 ☎042(5)72(5)141

※オンライン受講の方法は前日までにメールでご案内します。

当日、参加者側の環境による接続や音声の不備についての

問合せには対応できませんので、予めご了承ください。



〈私の本棚から 第2回〉

福岡伸一・伊藤亜紗・藤原辰史 著

『ポストコロナの 生命哲学』

山下 幸代

山下 幸代



日本国憲法が施行された年に生まれた私は、たまたま大きな災害に遭うこともなく、今、思うと本当に穏やかな人生を送り、そして、人生の終末に入ろうとしているのだらうと思っていました。ところが2020年に始まったコロナ禍は、まさかの一大事となりました。連日、テレビで報道される多くの人の死、行動規制、誹謗中傷のニュース等々。人間の力ではどうしようもないという無力感。そのまま、あつという間に3年が経ち、その中で、三人の親しい友の死の知らせを聞きました。駆け付けて、その人のそばで別れの言葉を告げることも出来ず、言い様のない空しさだけが残りま

した。そんな時、今年の春、公民館の本棚でこの本を見つけました。2020年8月にNHKの番組「コロナ新時代への提言2」で三人の分野の違う学者がオンラインで考えを寄せ合わせたものが、一年後、一冊の本としてまとめられたものだそうです。

この本の一章、福岡伸一氏の文に宮沢賢

治の『春と修羅』がありました。「わたくしという現象は 仮定された有機交流電燈の ひとつの青い照明です」つまり、人間はどんなに強くても生命体の一つに過ぎない。生まれて死ぬものというものを、あたりまえのこととして思い出すことができ

ました。又、敵と見なされるウイルスも、突如地球外から現れて、人類を亡ぼそうとしている「悪者」ではなく、人類も含め、生命の大きな進化の流れに手を貸す一つのピースであることも書かれています。

私を感じた空しさは、亡くなった人達が、ウイルスに負け、処理された物体としての死に対してのものだったと思うのです。

三人の科学者は互いに実際に会ってはいないが、偶然、それぞれの書棚に宮崎駿のコミック版『風の谷のナウシカ』が並んでいたということが分かり、それがテーマとして選ばれたということにも興味をひかれました。数十年前に人気のアニメともなりましたが、今のコロナ禍を暗示するものがあったのだろう。

人間の力だけで押さえつけようとしても出来ない、また、してはいけないこの地球の生命体すべての問題を私も考えたくて、次は、コミック版の『風の谷のナウシカ』や、宮沢賢治の作品を改めて読もうと思います。(集英社)